2014 5/27
No.1971
毎月第2・第4火曜日発行

政経かながわ

一般社団法人
—神奈川政経懇話会—

カルガモの大家族、すくすく成長中ー。秦野市今泉の今泉名水桜公園の湧水池で気持ちよさそうに泳ぐカルガモの親子の姿が来園者を和ませている。近くの住人によると、５月上旬ごろから姿が確認できたという。（18日撮影）

神奈川新聞社

政経かながわ

2014 5/27 No.1971

contents

視点・点描 3
「絹の道」はどこに続くか

講演録 4
「パワーシフトと日本の進むべき道
～これからの日米関係を中心に～」
ＰＨＰ総研国際戦略研究センター長、
主席研究員　　金子　将史

政　治 8
解釈改憲、反対が過半数
世論は「安保より経済」

国　際 10
韓国、旅客船沈没に衝撃
危機管理の課題浮き彫りに

国　際 12
ナイジェリア集団誘拐事件の闇
過激派がはびこる背景

くらし2014 14
広がる男性介護者への支援

広告珍談 16
新聞広告が始まった⑩
広告だけの新聞

NNAアジア経済リポート 17

神奈川景気データファイル 18

神奈川景気データファイル 19

事務局だより

◇横浜定例講演会

2014年６月10日（火）13時30分～15時
ホテルキャメロットジャパン4階「フェアウインドＩ」
講師はコリア・レポート編集長の　辺　真一　氏
演題は「急展開する日朝、日韓関係の行方（仮題）」

視点点描

「絹の道」はどこに続くか

群馬県の「富岡製糸場と絹産業遺産群」が世界文化遺産に登録勧告された。生糸の輸出港だった横浜も「絹の道」でつながっていたから、とお祝いムードだ。

勧告に合わせたわけではないというが、シルク博物館、横浜開港資料館、県立歴史博物館（いずれも中区）で「横浜絹回廊」と称してそれぞれの視点から絹と輸出にかかわる企画を開催中だ。以下は、順々に巡っての感想。

「蚕の化せし金貨なり…明治大正の生糸産地と横浜」と銘打ったのは開港資料館。近代製糸業の発展を中心に、横浜の役割と各地の業者の活動をたどる。タイトルは明治後期、宮城県の佐野製糸場のためにつくられた唱歌「日本蚕史」の一節「みくにの富を増すものは、蚕の化せし金貨なり」から。富国強兵、殖産興業を支えた自負を感じた。7月13日まで。

県博の「繭と鋼　神奈川とフランスの交流史」展（6月22日まで）は、幕末・明治にフランス人が見た神奈川の姿を紹介する。展示の中核をなすのは、フランス人実業家で日仏の文化交流史を研究するクリスチャン・ポラックさんのコレクション（明治大学図書館蔵）。タイトルは、外貨獲得のため日本から生糸が輸出され、フランスからは造船や製鉄など近代化を支える技術がもたらされたことを示す。例えば横須賀製鉄所はその後、造船所となり、横須賀鎮守府造船部、横須賀海軍工廠などと名を変え、現在は米海軍の基地だ。

〝本家本元〟のシルク博物館では、やや時代がくだって戦後に輸出ピークを迎えたスカーフに焦点をあてた「世界に羽ばたいたスカーフたち」展（6月22日まで）。「横浜スカーフ」という言葉は最盛期にはなく、当時は各国メーカーからの受注生産が主だったという説明にはびっくりした。つまり途上国として「下請け」をしていて、言ってみれば今の中国や東南アジアと同じ立場ということらしい。ちなみに富岡製糸場については、昨春「群馬県立日本絹の里」と姉妹館になったのを受けて大々的に紹介したのと、「横浜絹回廊」で他2館に関係資料貸し出し中のため、正式に遺産登録された時点での展示を考えるという。

「祝・世界文化遺産」というお祭り気分は、それはそれでいいけれど、日本の製糸産業の発展が昭和の軍国主義を支えたという見方もできる。「絹の道」は、人々の幸せにつながったのだろうか。

（神奈川新聞社文化部長　青木　幸恵）

広告だけの新聞

いまから10年ほど前、日本の新聞業界は恐れおののいた。スウェーデン生まれの新聞《メトロ》が、いつわが国に上陸してくるかと。

《メトロ》とは無料の新聞、つまりフリーペーパーのタイトルである。これぞ、活字メディアのバイキング。1999年、イギリスに上陸。あっという間に100万部の発行。伝統ある高級紙デーリー・テレグラフが90万部、タイムズが60万部のころ。フランスも攻められ、パリの高級紙も大衆紙も部数激減。アメリカにも上陸、欧米16ヶ国を席巻。1450万人をトリコにした。

新聞は毎朝、自宅に配達される日本と違って、キオスクで買うものと習慣になっているから無理もない。いつもどおりキオスクで、どの新聞にしようかと迷っていると、いきなり無料の新聞が手渡される。そこそこ読める記事が載ってればもう買わない。

韓国に現れたのは2002年5月、たちまち48万部をばらまいた。いよいよわが方へやってくるとおびえていたら、なんと足元からでるはでるは。広告だけで編集された、無料の新聞。みなさんご存知のアレ!!

新聞が広告を載せるのはあたりまえだけど、あまりに広告が多すぎた福沢諭吉の《時事新報》は、広告新聞（本誌1929号をどうぞ）とあだ名された。もちろん、しっかりした記事がたっぷり掲載された。ところが、紙面ぜんぶが広告だけの新聞が本当にあった。

1863（明治11）年6月、東京日日新聞に「来る十六日から弊社にて広告ばかりを版行にして」、毎日、5000部を無料で配ります。広告をだしたい人はお申しで下さい。1行は18字、3銭。フリガナ付きの大きな活字も、イラストもOKと広告がでた。

タイトルは《広告日表》という、記事なし日刊紙。発行したのは東京銀座の引札屋、つまり広告取次店。あのマルチ人間こと、岸田吟香（1915号をどうぞ）である。横浜でアメリカ人ヘボンから、西洋目薬を免許皆伝されて銀座で大成功。となりに新聞社を設立、当時最大部数の《東京曙新聞》についで135万部も発行。3年後に《広告日報》と改題した。これはもうかるとその年、図の《ひきふた新聞》がでた。1段目になんとなく記事、2段3段は出版物や虫歯のクスリ、のれんは畳屋の広告である。つぎに《勉強広告新聞》に《ちらし》に《広告大新聞》と、似たような新聞がぞくぞくと現れた。

（美術エッセイスト、茅ヶ崎市在住）

ひきふた新聞

（図）《ひきふた新聞》第90号、明治11年12月6日